

藤原宮 朝堂院朝庭の調査

飛鳥藤原第179次調査 現地説明会資料
(独)国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部



発掘調査区全景（南東から）

朝堂院は、大極殿院の南に位置する回廊に囲まれた東西 235 m、南北 320 m の空間で、中央の広場（朝庭）を 12 棟の建物（朝堂）が取り囲みます。朝堂院では、様々な政務や儀式が執り行われました。

奈良文化財研究所都城発掘調査部では、2008 年度以降、朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明にむけた発掘調査に取り組んでいます。今回の調査地は、朝庭の東北部にあたります。

これまでの調査で、朝庭は礫を敷いて整備されており、儀式で使用する幢竿（はたぎお）と考えられる柱穴群や、排水用の暗渠などが設けられたことがわかっています。また、礫敷の下層には、藤原宮造営期の遺構（先行条坊・運河・建物・溝・沼状遺構など）が存在することが明らかになっています。

今回の調査は、礫敷広場での空間利用のあり方や礫敷下層における遺構の状況を確認することを主な目的として進めてきました。調査は 2013 年 4 月から開始し、現在も継続しています。調査面積は 1430 m²です。

調査の結果、藤原宮期の遺構として、朝庭の礫敷広場と排水用の礫詰暗渠、礫敷上から掘り込む東西方向の柱列などを確認しました。

柱列は 3 m（10 尺）間隔で、19 基を確認しました。長さは 54 m 以上に及び、さらに調査区の東に延びる可能性があります。柱穴はやや小さめで、径 30 cm 前後の不整円形をしています。埋土に礫を含んでいることから、礫敷上から掘り込んだことがわかります。柱穴直上の礫敷面は、周囲よりわずかに盛り上がっています。柱列の用途などについては、今後検討を深めていく必要があります。

また、礫敷広場の下層では、大小複数の沼状遺構が見つかりました。これまで沼状遺構は 1 つの大きなものと考えていましたが、複数の沼状遺構が隣接していたことが明らかとなりました。埋土には木屑が含まれ、岸付近には瓦が多量に捨てられているところもありました。

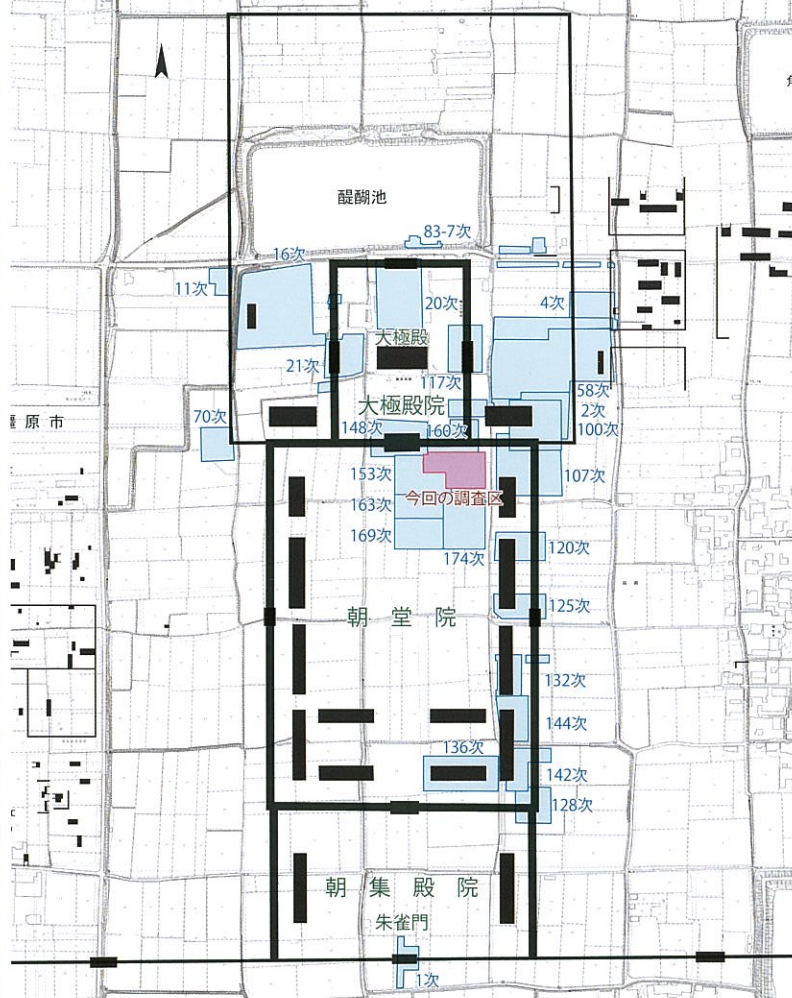
朝庭の空間利用や藤原宮の造営過程を考える上で、貴重な手がかりを得ることができました。



礫敷広場全景 北から



沼状遺構の岸と瓦溜まり 北西から



調査区位置図 (青色はこれまでに発掘調査した場所)



礫敷を一部はがした状況 西から



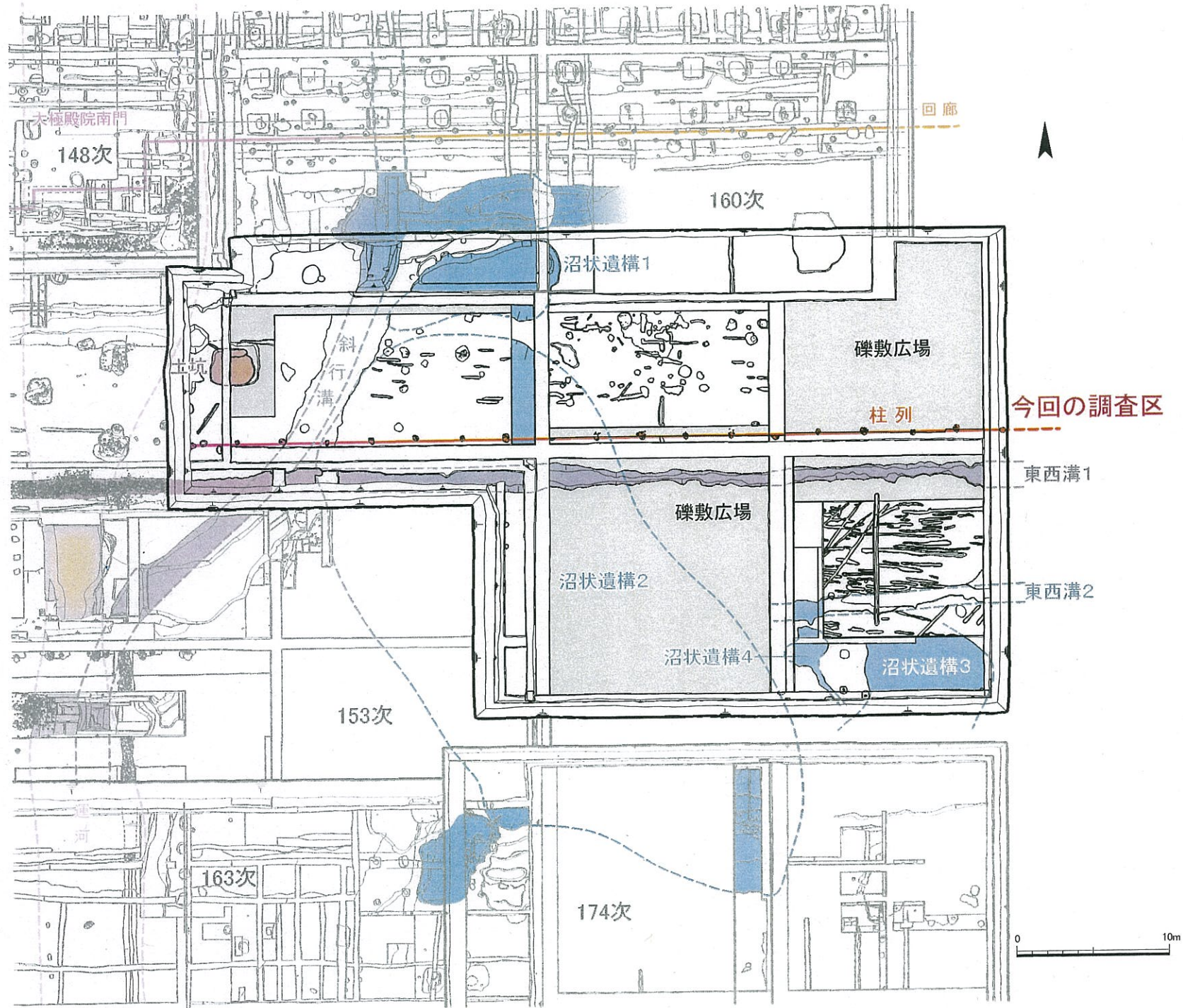
東西方向の柱列 西から



礫敷近景



礫敷の検出作業



大極殿院南門

148次

160次

回廊

沼状遺構1

礫敷広場

斜行溝

柱列

今回の調査区

東西溝1

礫敷広場

東西溝2

沼状遺構2

沼状遺構4

沼状遺構3

153次

163次

174次

